この濾過槽は昭和31年に水道が敷設されたことにより、使用されなくなった。しかし水道事業にも各戸に対して多額の負担金が掛かったため、水道設置後のしばらくの間は濾過槽脇に水道の共同栓を設け、利用していた（第15図）。なお濾過槽自体の撤去はこのしばらく後のようであるが、明確ではない。

3　新田生活と水濾し甕・濾過槽

(1) 生活の場での利用

以下、主に共同濾過槽を中心に、状況的考察を述べておきたい。

毎日の生活に水は欠かせないものであり、水濾し甕や濾過槽も毎日使われていた。特に夕方になると、各家庭では大人が野良仕事から帰宅するまでに、子どもたちは濾過槽から水を汲んで台所（所帯場）へ用意しておくことが仕事であった[21]。集落の濾過槽まで担桶を担ぎ、濾過槽から水を汲み、ポンプ踏みをした後、家まで水を運搬していた。飲食に使用する水はすべて濾過槽から汲んでいたため、その運搬だけでも大仕事だった。家では台所の水甕に水を移し、木蓋をして大切に使用した。水濾し甕もあったが、濾過槽を利用するようになってからは、あまり使用していないようである[22]。水汲みに出て行っても、濾過槽の水を利用することにはメリットがあったのであろう。

ただ、風呂の水などは用水の水を汲んだものがそのまま利用されており、用水路から水を掬った際にたまたま入り込んだメダカや藻などが風呂の中で浮いていたことはよくあったという[23]。また洗顔や野菜洗いなどの炊事の下ごしらえなどは、用水へ出て、直接用水の水を掬って洗っていたという話が大勢で、料理と飲み水以外は濾過槽を通さない水を利用していた。

家庭で使用された排水は、そのまま用水路へ排水せず、台所や風呂場の下に設置された甕に溜められ、毎日それを畑に撒いていた。こうすることで用水路を汚さず、また肥料を節約できたという[24]。

(2) 設置場所と規模について

濾過槽は文字どおり水を濾過するための施設であり、使用されたのは上水道の普及以前であった。このため、特に共同濾過槽の設置場所は自然と用水路から水を組み入れやすい用水路脇となる。沖新田では住居が用水路に沿って立ち並び、それを基として集落を構成しているため、その集落ごとに設置されるが、設置される地点は集落の中心部に近い位置で、かつ土地の提供のあった場所である。

水は河川から取水されて用水路を流れ、集落を次々と貫流していくうちに、浮遊物や一部排水等によって濁りが多くなる。よって河川の取水地点に近い用水路では比較的濁りも少なく、そのため濾過槽自体も貯水槽を含めて３槽式（濾過槽２槽、貯水槽１槽）で対応が可能であるが、下流にいくにしたがって増加する浮遊物や濁りなどに対応するため、４槽式（濾過槽３槽、貯水槽１槽）へと変化していく。また集落の規模が比較的大きく、濾過槽の水を大量に必要とする地域のそれは、大規模かつ多槽なものとなる。これは、大規模・小規模の濾過槽とも、設置時点での浄水能力の差としては大差ないものの、毎年夏の掃除までの長期間にわたって毎日使用し続けるものであるため、大量に濾過水を必要とする集落での濾過槽では、濾過処理能力を維持するために濾過槽の規模や管理に違いが現れるものと考えられる。よって、同じ３槽式のものでも、上流に大規模なものが、下流に小規模なものがある場合もあり、濾過槽だけではその濾過処理能力を一概に比較することはできず、集落の規模や用水路自体の流路など、さまざまな複合的要因の中において、経験的に設計され、作られていったものと考えられる。

(3) 製作・使用年代について

沖新田で濾過槽が設置され始めたのが大正６年頃とされ、その後現在までに判明しているもので最も新しいものが、今回取り上げた横樋の濾過槽で昭和 18 年のものである。沖新田の歴史全体から見ると設置され始めたのはかなり新しい。使用年代としてはおよそ大正時代中・後半から昭和時代前半、

最終は昭和31年以降の上水道敷設までの範囲とみることができる。

(4) 濾過槽の導入契機と衛生観念

用水路の水を濾過槽を潜らさせることによって、それが現在のような浄水場での濾過と同様になるものではない。すなわち、仕組みとしては現代の浄水場での仕組みと似るが、その過程における沈砂池や濾過池などの通過時間や、消毒・殺菌といった衛生面において比較すると、濾過槽は未熟なものであった。このことは濾過槽の水に塩味が含まれることはともかく、濁った水はほとんど濁ったまま、雑菌の混じったものはそのまま、利用されていたといえる。

濾過槽の導入契機については不明な点が多い。しかしここであえて示すとするとが、おそらく1905（明治38）年に岡山市で浄水場が設置され、近代的な水道通水が始まったことが、新田地域の濾過槽の設置への動きに繋がったものではないかと考えられる。岡山市の水道設置の経緯としては、当時コレラなどの伝染病が流行し、これに対する人々の衛生への意識が向上した結果、急速に普及したものとされる[25]。しかし当時の浄水場からの配水は旧岡山市の一部であり、新田地域ではそれまでどおり、川の水、用水の水をそのまま飲用する生活をしていた。しかし新田地域は井戸もなく、吉井川や旭川といった大河川から直接導水している地域はともかく、砂川や倉安川などの小河川から、上流地域の排水が比較的多い割合で混ざる水を飲用にせざるを得ない地域の人々にとって、伝染病や寄生虫、異臭などをに悩まされることのない、清潔な水を得ることは何よりの希望であっただろう[26]。それはこの政田地区や沖新田に限らず、幸島新田や藤田地区などの人々も同様だったはずである。特に沖新田の小学校などでは戦前から戦中の時期に肝臓ジストマの怖さについて教育がされ、生水を飲まないことなどが周知されていた[27]。こうした、少しでもきれいな水を得たいとする新田地域の人々のささやかな願いが、浄水場と同様の仕組みである濾過槽や水濾し甕の導入に繋がったのではなかろうか、と考えるのである。たとえそれが用水路を流れる水と大差なくとも、人々は大いに安堵したのであろう。

およそ大正年間から戦前の時期を中心として干拓地で導入された濾過槽は、人々の衛生を守りながら、上水道の普及とともに消えた。

本稿を草するに当たっては、多くの方から教示を得た。また君津・銀座在住の西﨑知義氏には同所の濾過槽を、政津・土手根在住の溝口尚正氏には政津土手根、政津川内、政津二間川の濾過槽について調査の段取りや実見にあたってご尽力いただいた。皆様に記して感謝を申し上げます。

注

1 光津・上田原（かみたわら）用水在住の岩﨑俶堂（よしたか）氏教示。

2 この地域では、いわゆる「備前焼」のことを、生産地の地名が伊部（いんべ）であることから「伊部焼」という。近年では次第に「備前焼」といわれるようになりつつある。

3 君津・銀座在住の西﨑知義氏教示。

4 岩﨑俶堂氏の調査・教示。

5 「政田を知ろうふるさとマップ」（同作成委員会、2000年）の作成に際し、岩﨑俶堂氏の調査によって16か所の地点が明らかにされた。これはすべて共同濾過槽である。設置地点については、同マップに記載されている。なお、今回報告するうちの私有の濾過槽2基（政津・川内と君津・銀座）はそれに含まれていないため、現在までに共同・私有計18基となる。

6 このうち1基が平成18年初頭に取り壊された（政津・土手根の共同濾過槽）。現存は3基で、共同濾過槽1基（升田・横樋）、私有の濾過槽2基（政津・川内、君津・銀座）である。

7 もともと、干拓地を中心とした各地にあったものとみられるが、記録等も少なく、不明な点が多い。岡山市興除（こうじょ）地区では、明治中期から家庭で「砂濾し甕」が設置され、また大正時代には「天水井戸」の設置や水汲み業者からの購入もあった。また時期は明確にされていないが、共同の濾過装置が大水門と大曲の内尾側にあって、上水道開通まで使用された(『興除村史』興除村史編纂委員会編、1971年、194頁)。福田地区でも、各家庭では「すなこしがめ」や天水井戸の設置、地域では外野・二間堀・中野町・

寺池・役場前の５か所に濾過槽あり、川水を濾過していた（『わたくしたちの福田』岡山市福田地区地域活性化事業実行委員会編、1995 年、14～15 頁）。いずれも肝臓ジストマやコレラなどの予防を目的としたものとみられる。

[8] 政田小学校校庭に設置された濾過槽は、早くから電動ポンプによる揚水であった。岩﨑俶堂氏、升田・横樋在住の岸野拓郎氏教示。

[9] 濾過槽の設置された付近はやや川幅が広く、その付近を通称「三間川」と称していた。これは用水路の肩部分の幅が約３間（約 270cm）であったことに由来している。

[10] 実測調査がされる前に、写真に見られる上部構造が取り壊された。調査については担当者から所有者に対してその旨の依頼がされる以前であり、結果的に調査の遅延が実地の記録を逃したこととなった。しかしここに示す復元図作成に当たっては、所有者である岩﨑富美（とみ）氏の積極的なご協力により、石組みやコンクリート構造のわずかな痕跡のご指摘や多くのご教示をいただいたことで調査・記録ができた。

[11] 政津・土手根在住の徳田始成（もとなり）氏教示。

[12] 政津・土手根在住の徳田豊（とよ）氏教示。

[13] この政津・土手根の濾過槽の使用は、土手根集落および東に隣接する東用水集落（上東用水）の人々が共同で使用していた。岩﨑富美氏、徳田豊氏らの教示。

[14] 渡辺新田は、旧津田村大字君津浜の内にあり、行政区画上は沖新田の一部となる。規模は３町程度で、沖新田以前に干拓された松崎新田の堤防外に位置し、沖新田の一部として砂川河川敷の小規模な土地とともに農耕がされていた。しかし厳密には、この渡辺新田は沖新田が干拓される直前に作られた新田とみられ、金岡新田開発による砂川の付け替えがなされた結果、その河口部となる現在の渡辺新田付近に小規模な砂州が形成され、生じたものと考えられる。記録としては、「備前国上道郡沖新田開墾図」（岡山大学池田家文庫所蔵、T7-94）、「沖新田東西之図」（岡山市立中央図書館所蔵）などに「渡辺新田」と記載が見られる。地元の古老の一部が「なべの地は三町」と伝える程度で、明確な伝聞はない。

[15] もともと２槽式であったかどうかは不明である。現状では第２槽の排水口がそのまま水担桶等へ汲み出せる状態ではなく、石組に沿って地下方向へまっすぐ伸びていることから、これは貯水槽である第３槽へつながっていた可能性もある。ここでは他例の状況などから、もともと３槽で構成されていたものとして考えておきたい。

[16] 当時この地に住んでいた岸本啓子氏教示。

[17] 二間川の濾過槽については、主に政津・二間川在住の岸本千加恵氏の教示による。

[18] 用水路肩の幅が２間（約 3.6m）程であることから二間川と名付けられたようである。現在は三方コンクリートの用水となり、以前よりも狭くなっている。

[19] この二間川付近では、幹線用水路は分流を繰り返して上流部の「三間川」と比べて若干狭くなっている。政津・土手根から二間川集落付近は用水路沿いに家並みが立て込んでおり、それぞれに川市（カゥエーチ）が設置されていた。川市の脇には夏場の日差しをさえぎる目的から梅檀（せんだん）の木が植えられており、その情景から地元では「せんだ川」と呼ばれていた。溝口尚正氏教示。

[20] 政津・川内在住の河内茂氏の教示。

[21] 朝には水を汲むのが少し遅い時間になると、上流地域で用水を利用した後の排水やゴミを含んだ水が流れてきていた。そのため特に炊事に使用する水は、まだ上流地域の人々が用水を利用しないような、夜明け前から水担桶（みずたご）で汲み上げていたという。西﨑知義氏教示。

[22] 岩﨑俶堂氏教示。

[23] こうした風呂は「メダカ風呂」といわれていた。岩﨑俶堂氏教示。

[24] この項、岩﨑俶堂氏、西﨑知義氏、小川政男氏、ほか多数の方々の教示。

[25] 岡山市水道誌編集委員会編『岡山市水道誌』岡山市水道局、1965 年。

[26] 上水道敷設前には、こうした理由などから上水道敷設の要望は強かった。岡山市水道局総務部企画調査課編『岡山市水道史　追録』岡山市水道局、1981 年、275～276 頁。

[27] 小川政男氏教示。戦前には、政田小学校でも肝臓ジストマの研究をする訓導がいたという。西崎知義氏、岩﨑俶堂氏教示。

岡山市埋蔵文化財センターのご利用案内

所 在 地　〒703-8284　岡山市網浜 834-1
Tel　086-270-5066　　Fax　086-270-5067

公開時間　午前９時から午後４時 30 分まで

休 館 日　日曜日、国民の祝日に関する法律に規定する休日、年末年始（12 月 29 日～１月３日）

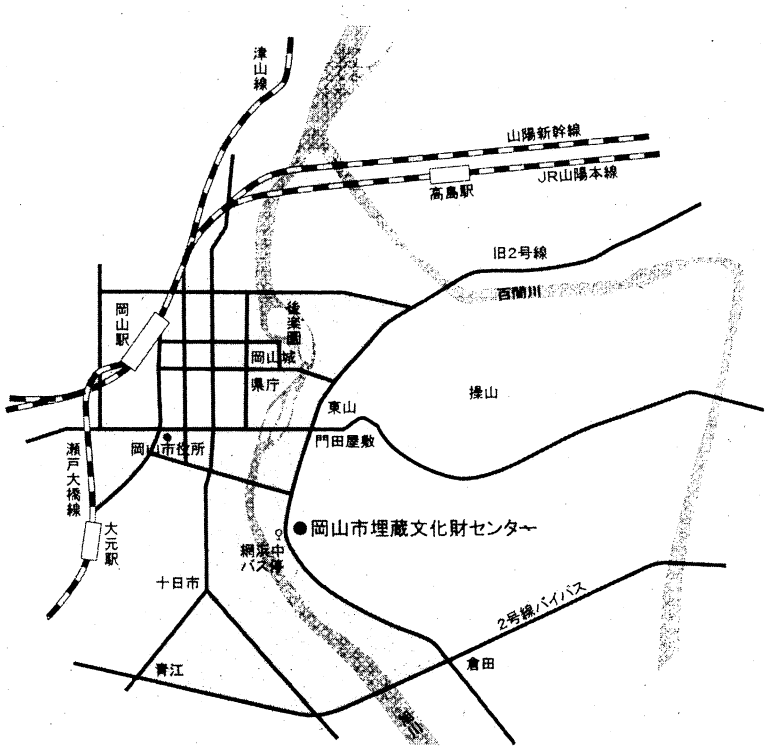
入 場 料　無料

交通案内　両備バス「網浜中」（岡山駅から 15 分）下車、徒歩５分

岡山駅から

- 新岡山港入口行
- 新岡山港行（天満屋・新道経由、四軒屋経由、山陽学園・四軒屋経由）
- 岡山ふれあいセンター行（四軒屋経由、山陽学園・四軒屋経由）
- 桑野営業所行
- 倉益南行

ホームページアドレス　http:/www.city.okayama.okayama.jp/kyouiku/maibun/



岡山市埋蔵文化財センター年報６

平成１７（２００５）年度

発行年　２００７年３月３１日
発　行　岡山市教育委員会
　　岡山市大供一丁目一番一号
編　集　岡山市埋蔵文化財センター
印　刷　株式会社 印刷工房 フジワラ